三面川紀行　～ふるさとの母なる川・イヨボヤの川～

企画調査部　主事　小林　千夏

収穫も終り晩秋の気配が漂う田畑を眺めながら、新潟から羽越本線いなほ号に揺られて50分。新潟県北部に位置する村上市は県内最古の城下町として静かな、しかし誇りを感じさせる町である。武家屋敷や伝統工芸の「堆朱」がその歴史を語っている。また、特産の村上茶は日本北限のお茶である。最近では皇太子妃雅子様ゆかりの地としても話題となり、市の花のはまなすは御印になっている。

村上と言えば、地元で「イヨボヤ」と呼ばれる鮭を抜きには語れない。「イヨ」も「ボヤ」も魚を指すから、さしずめ「魚の中の魚」という意味だろう。いかに村上の人々にとって鮭がかけがえの無いものかが伺える面白い言葉だ。また、鮭料理も名物酒びたし等の他何十種とある。

このイヨボヤの母なる川「三面川」は、朝日岳に源を発し市内を悠々と流れてその清流を日本海へと注ぎ込む。流域面積664.3㎢、流路延長約50㎞。流域の約９割りがブナ林から成り、藩政の昔より鮭漁が盛んであった。江戸中期、青砥武平次は鮭が安心して産卵・ふ化出来るよう、本流からバイパスした人口河川を考案した。「種川」と呼ばれるこの世界初の試みは現在も各国で受け継がれている。

村上市のメイン施設、『サーモンパーク』は市民の憩いの場である。敷地内の美しい芝生広場の一角には、青砥武平次の銅像が、まるで鮭の旅立ちと遡上を見守るように建てられている。中でも、サーモンパーク内のイヨボヤ会館には是非立寄って頂きたい。ミニふ化場や豊富な展示物をじっくり見学すれば鮭博士になれそうだ。地階にはガラス張りになった人工産卵河川が設けてあり、この季節、運が良ければ産卵シーンを見る事が出来る。

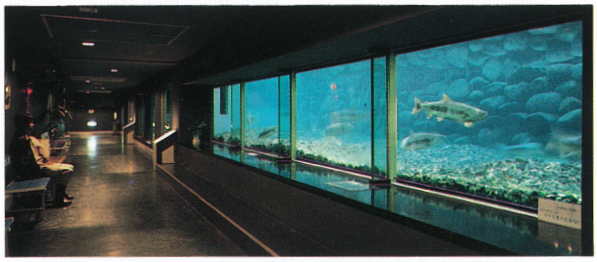
同じ様な施設は北海道にもあるが、本州ではここが初めて。今回、ちょうど一組のペアが産卵場所を作っているところを見学できた。雌が尾鰭で砂利をはたいて穴を掘る。雄は雌の回りを守っている。どちらも体内傷だらけ。命がけの産卵である。約一時間半、他の見学者と共に時には声を掛けながら、今か今かとその瞬間を待ったが、結局今回は見ることが出来なかった。館長によると産卵準備には半日かかるのだそうだ。次回は一日ベンチに腰掛けてきっと感動の瞬間に立ち会おう、と決心してサーモンパークを後にした。

今でこそこれらの施設も出来、日本でも屈指の遡上率を誇る三面川だが、過去には幾多の困難があったという。青砥武平次以降、一時は帰ってきた鮭達で川が黒く盛り上がる程の豊漁もあったが、明治中頃からは内紛や乱獲のためその数も激減し、絶滅寸前に陥った。漁業権を主張する住民側と、増殖を計る行政や漁協などとの間で長く激しい議論がされた末、昭和52年、遂に地域が一体となり、増殖のための「一括採捕」が開始された。その後、遡上数は徐々に回復し、平成４年には約14,000尾が確認された。

三面川鮭産漁業協同組合組合長の高橋さんは、当時の産みの苦しみを味わわれたお一人だ。60余年の人生を三面川の自然から今も学び続けている。近年、帰ってくる鮭の小型化や肉質の異変の問題が話題になることが多い。「人工ふ化による過保護とか、１～２年で帰ってくるものが混ざっているからとか、原因はいろいろと言われている。でも、自然には一言で言えない何かがある。現実にある自然をどう活かし利用していくのかを考えなくては。」まさに、青砥武平次がやっていたことそのものである。

今、高橋さんは「人の心の留まる川、魚も人も心が安まる川を造りたい。私が自然から学んだ事を次の世代に残していきたい。」と言う。黄金色に染まった山々を背に、悠々と澄んだ流れをたたえる三面川には『望郷』という言葉が良く似合う。いつまでも「ふるさとの母なる川・イヨボヤの川」であるために、村上の人々の努力は続いている。また現在、新潟県では、御成婚記念事業「三面川歴史・文化の水辺空間整備」に取り組んでいる。

三面川（朝霧）



イヨボヤ会館（生態観察室）